

革命の美術

アラン・ナバラ(フランスの美術史家)

50年代半ば桜井氏は<九州派>の創始者としてその名を知られるようになる。Jun EBARA氏によれば<九州派>は「日本の芸術的な過去を白紙状態(タブラ・ラサ)にすることの挫折の後」を期待し、二科や日展といった公式の場以外で画家が自らを表現することができるような運動を生み出したのである。

このグループを知らしめた最初の記事の中に、私たちはしばしば「反東京」グループ、または「反絵画」グループといった性格付けをする表現を目にすることができる。その表現の中に日本芸術に新たな息吹を吹き込もうとする思いを読み取らなくてはならない。

1957年から1968年にかけて、このグループの芸術家たちは一冊の雑誌:九州派を創刊した。そこでメンバーは各々の研究と作品について報告を行うのである。東京は日本の文化的中心となっており、九州派は彼ら自身の存在がどんなものであるのかを知らしめようとしたのである。つまり独学の画家たちが彼らの新たな息吹の源を彼らの「国」九州に持っていることをしらしめようと望んだのである。

西日本展覧会が開かれた1957年という年はこのグループ内に抽象芸術への傾向を持ちながらしかも具象芸術であるという方向性を生み出した。

九州派はまた1955年から60年にかけて日本が少しずつ経験したアヴァンギャルドの傾向を定義付けるための画家たちによる努力というものも明らかに示したのである。

「何よりもまず肝心なことは芸術家のメッセージをその作品のなかでためらうことなく表現しなくてはならないということである。つまり画家がその内容と関係を持ち続けるには激しく探求しなくてはならないのである。」

このことは九州派の本質的テーマの一つ:つまり精神的真摯さの探究、画布との一致というものを示している。九州派の画家や作家は画布を文学的1ページとして、また散文や詩のリズムとしてとられることを主張しているのである。

日本における戦後美術史をたどる一般的作業は九州派をアンフォルメルな(不定形な)芸術としてとらえ、またこの芸術形態を選択する者が増えるにしたがって九州派

の行動を「革命の芸術」として、また見知らぬ世界へ旅立つ若き芸術家のそれとしてとらえている。そしてこの動きの中で彼らはヨーロッパにおける<アンフォルメルな>芸術の代表的人物、リオペル、フォトリエ、ウォルスなどと出会うことになるのである。